

第 VI 部

総括討論：授業研究と地域の要請に応える養護学校

総括討論：授業研究と地域の要請に応える養護学校

2002年2月25日

出席者：秋田 晃（藤沢市立羽鳥中学校）
瀧澤久美子（横浜市在宅障害者援護協会）
富岡 英道（藤沢市立白浜養護学校）
中野佳代子（篠山市立古市小学校）
舟川 和宏（篠山市立篠山養護学校）
渡辺 幹夫（横浜市中部地域寮育センター）
笹本 健（肢体不自由教育研究部）
滝坂 信一（肢体不自由教育研究部；司会）
徳永亜希雄（肢体不自由教育研究部）
伊藤 尚志（長期研修員；長野県稲荷山養護学校）
山口伸一郎（長期研修員；埼玉県立熊谷養護学校）
—敬称略—

I. 今、養護学校が求められている姿勢 そして授業研究

滝坂 この3年間、授業研究を通して学校内の教育活動の充実を図り、小中学校や福祉を含んで地域社会との連携を保護者を通じて図る、さらにこの二つをどのように連動させるかということ課題として取り組んできました。これを、篠山市、藤沢市、横須賀市の三つの地域を対象として市立養護学校三校に協力機関をお願いさらに都市部ではない地域でのことを考えて奄美大島を選んで対象地域にした。この協議では、この3年間で取り組んだり議論してきたことを踏まえて意見交換をしたい。

まず、学校内の教育活動の充実をどのように図るかというところから始めたい。

舟川 担任が変わることによって目標が変わってくる。このことによって親が不信感を抱く。目標を具体的にするとこの点は難しくなる。最近「自立活動の時間は病院に行って訓練を受けるから、自立活動の時間を受けたことにしてほしい」という保護者が出てきている。まさに、「専門性とは何か」が問われている。

渡辺 療育センターを出て就学していく子どもたちについて、学校と連携していこうとするがなかなかうまくいかない。私は、①入学先が決まった後、先生に療育センターでの子どもの姿を見に来てもらう、②その子の資料を送付する、③5月頃に療育センターの職員が学校に様子を見に行き意見交換する、を「3点セット」と呼んで定着していったらよいと考えているのだが、システムになっていかない。ある問い合わせも、心理や保育の担当者には要請がなく、

PT、OTにどういう子が聞きたがるという範囲にとどまっている。

富岡 渡辺さんの言った内容は、市のシステムの問題なのだろうか、それとも個々の学校の問題なのだろうか。

渡辺 市のシステムになっているわけではなく、何とか市のシステムにしてほしいと思っている。

笹本 舟川さんの「PT、OTに行ったのを自立活動に出席したことにしてほしい」という保護者のことばについてだが、「自立活動は障害の改善をしてもらえる時間だ」と理解していればそういうことになるだろうし、社会資源がその地域にあるかないかでも事情は違ってくるように思う。

秋田 2年前に篠山養護学校を訪問したときにはあまりそういうことが問題とはなっていないかのように思うが。

舟川 毎年10人ぐらい教員の移動がある。この3年間で50人の内30人が代わっている。来て1,2年目の人が多い。

富岡 藤沢市では学校を休んでPT、OTに行くのを認めている。学校という機能ですべてのことはできない。

徳永 自立活動を教員とPT、OTと一緒にやっている施設併設の肢体不自由養護学校を知っているが、保護者から人気がある。個別の指導計画については学校がつくるという考えから<KJ法>などを使って複数でつくり、担任が代わっても引き継がれるようになっている。

中野 平成10年度当時は、引継がきちんとできていたように思う。「皆が担任」という考え方で個々を見ようとしていた。その子の全体を見て何が見えるか、課題は何かを考え、「教育相談部」がここがおかしいというような点に気づいたところを指摘するということが円滑に行われていた。保護者が様々なことを要求するようになってきており、これに対してどのような歯止めがかかっているのだろうかと感じる。

滝坂 白浜養護学校で、「親と一緒にやる授業研究」を提案し行ってきている。これができていけば、個別の指導計画を保護者と一緒に考え、つくっていくという基盤はできるし、一貫性ということについても確保できるのではないかと考えている。

渡辺 療育センターにおける母子通園で、それはあたりまえにやることであり、やっていることだ。それが、学校に行くときとスパッと切られてしまう。なお、親たちがまとまって言うことと、親が個別に言うこととは違いがあるように思う。以前は「学校にお世話になっている」という保護者の捉え方であったように思うが、この5年「学校にモノ申す」人が増えてきている印象を受ける。道筋を工夫すればうまくいけるように思う。療育も職員だけで考えるのでは煮詰まってしまう。

富岡 他の学校で保護者を入れた授業研究という例はあるのだろうか。昔の親とはいろいろな話ができが最近の親は「あれをやってほしい」「これをやってくれ」と、要求はいろいろ出るが、相互の話ができない。要求ばかりで自分で考えたり工夫しようとしなくて多い。障害についても、シビアな体験をしてきていない。なお、学校というところは、小学校1年生がスタート（ゼロの出発）と考えているという側面が確かにある。

秋田 地域の特質もあると思うが、外部の人が入るのを喜ばないのは養護学校だけではなく小・中学校も同じ。親が清掃などで学校にはいることもあまり歓迎しない側面もある。「まず、親の話を聞こうよ」という姿勢になれない。一方、PTをしている弟から「学校の先生はどうしているのか」ということすべてをやらうとするのか」と言われたことがある。

徳永 自分が教員だったときのことを振り返っても、はじめは授業参観がいやだった。保護者がいつも学校に来ることについても、果たしてそれがいいことなのかどうか疑問も残る。

富岡 授業研究を、「教師の成長を支えるもの」ととらえたい。市立養護学校には、若くて養護学校に赴任した人は短期に転出する、教員経験の長い人の場合長期に在職するという傾向がある。この間の教師の成長は自己努力に任せられ放置されている状態にある。かつて教師は先輩の教師を見て徒弟制度みたいななかで育ったという時代があった。今は若手の教師が育っていない。研修の機会はあるがどれだけ役立っているかを考えると疑問がある。特に、単発の研修プログラムは教員の力を高めていくのに役立たないと言っている。

通常学級の教師は何でも抱え込まないとやっていけないという側面がある。これに対し特殊教育の専門性は、こういった状態から教師を解き放つことにつながるのではないか。特殊学級と通常学級との交流を前提としたネットワークを構築していくことが重要ではないかと思う。学校の中

だけではなかなか事態を変えることは難しく、外からの力が必要だと感じることもある。

II. 教師が求められるもの

秋田 藤沢市はかなり早い時期に特別指導学級（藤沢市における「特殊学級」の呼称）をつくったので、そこにお任せみたいになってしまった側面がある。統合教育は20年前にはほぼ定着したが、その内実がない。保護者の意識は大きく変化しているが、教師の意識は変わっていない。13年前の課題と今の課題が変わっていない。学校現場だけでちょこちょこやっても状況を変えることは難しい。市としての全体プランを作り方向づけをしないと駄目だと思う。現在特別指導学級の課題として、従来のような障害のある子とは異質な子どもたちが措置される。教師はいくらやってもやりきれないという実態が生まれてきている。対応の必要な子にはしなければならず、しかし他方パンクしてしまうような現実がある。

渡辺 横浜市では今年度から療育センターで行う学齢支援に1500～1600万円の予算がついたが、動けていない。学校に呼びかけ、子どもを真ん中において何かを起こすというのは、もう考えとしてやめた方がいいかなと思いつめている。

重度の子どもが在籍する養護学校について過日保護者と話していて感じたことがある。保護者は教員や養護教諭に感謝し、期待している。しかし、入学すれば一方的に信頼してしまい、そこから踏み出していない。他方、教員は医療職がないことに不安を持っている。療育センターの経験から、学校に医療職を入れることができれば教員には何ができるかが見えてくるのと思う。また、知的障害養護学校ではほとんど生徒とマン・ツー・マンに近い状態になっており、担任が何をしているかは見えるが学校として何をやろうとしているかが見えなくなっている。ことばとしてIEPが言われているが、保護者の意見を吸い上げられず、またその子に対して療育センターがやってきたこと、就学前のその子の育ちを受け止められない。この点、教員の移動がない私立養護学校は積み重ねができる。

瀧澤 重心の保護者が、「学校で生活行為をやって何かをやっているような気になっている。これを今の教師から取ったらやるのがなくなってしまうんじゃないか」と言っていたことがある。学校が多職種になっていく必要がある。今「死守している」ことを見直さなければならなくなる。保護者は、養護学校に行けば専門的な教育が受けられると思って就学させるが、現実には受けられない。教員にも本当に必要なことが何かを学ぶ機会がない。やはり家族は、

学校に期待している。先生たちはかわいがってくれて子どもが成長していることは事実だから保護者には言いにくいことがある。それは、先生方に子どもとその家族の暮らしが見えていないということである。暮らしに活かされない教育とは何かとってしまう。

舟川 篠山養護学校では、月に一回保護者に授業を見てもらい、スーパーバイザーをお願いしている大学教授と話してもらおう。細かに具体的に子どもの変化を見ようとする保護者と学校に任せようとする保護者と両極端である。授業や話し合いは個別の指導目標にそって行く。たとえば、「コミュニケーションを豊かにする」という目標を立て、教師の側から声かけを行ったとき、15回のうち何回回答するかというかたちで見ていく。この場合、視線を合わせることの意味を担任が保護者に説明するのだが、担任がかわると説明にニュアンスの違いが出てきてしまい、保護者のなかで何をしているのかがつながっていかないという難しさがある。

瀧澤 授業研究との話だったが、何が行われているのかよくわからない。教育目標というのはそういうものではないのではないか。たとえば、障害があることから生ずる経験することの不足にどう対応するか、選ぶ力をどう育てるか、＜母―子＞とは異なる関係のなかで他の大人に慣れる、他の子どもに慣れるといったことを、遊びのプログラムの中に設定する、といったことではないのか。また「教えてもらおう」という態度を形成することも重要な内容だと思う。

舟川 学校にしてほしいことを、保護者に書いてもらおう。たとえば「人間らしい対応」と書かれていたとすれば、それがコミュニケーションの力を育てることだということを保護者と話し合っ確認し、誰から見てもわかるような、目に見える方法で評価を行っていく。

伊藤 国立特殊教育総合研究所の人に来てもらって学校で授業研究会をやった。始めて子どもに会ったその方が、「あ、今左手で挨拶をした」と言った。決してそれは誰にでもわかるようなものではなかった。どうして始めての人にそのようなことがわかるのか。保護者にもこういったことは言えるはず。授業参観はよい機会であり、参加型の授業研究がよい。

笹本 授業を見て何を討論すべきか、その題材が必要なのではないか。記述できるモノではない、かかわりの機微みたいなものを授業研究の材料にすることが大切だと思う。自分を問うてみる。話すということは難しいことだけれど重要だと思う。

秋田 養護学校は、全人格を対象にする。子どもも成長し、学校で解決しなくても他で解決される。何を教えているのかと言われたとき、本当に何が必要かと言うことがあまり議論されていない。情緒的な面が軽視されているが、卒業させてみるとこの面はとても大きい。どんな先生と出会ったかがすごく大きい。しかし、時間がたってみないとそれがわからないという側面がある。

中野 小学校での教科学習を考えてみたい。「自ら働きかけていく子どもを育てる」ということを目標にして、教師集団が本気になってやったら、子どもは変わる。私が今いる学校は「トトロ」が出てきそうな学校だが、夢が創れる。外から来られた方が「ふと、もらされる」ことをどう受け止めるかが大切なのだと思う。その先生の人間性が問われる。どんな力をつけていくかが不明なままでの授業研究は難しい。担任が誰になっても続けていけるようなものとして表現されることが必要なのではないか。もちろん、子どもと教師、親の信頼関係を築いていかなければ、何をやってもうまくいかない。

渡辺 療育センターではケースカンファレンスをやっているが、基本的には、誰のためにやるかというところを間違わなければ、ずれないかなと思う。学校の先生の力量なんてどうでもよくて、いろんな人たちから子どものことが話題として出てくればベストだと思う。りっぱなケース記録を書くより、いろんな視点から光が当てられる、ちょっと違う目で見られていくことが大切なのだと思う。子どもに対してやるのは、自分の力量を示すためではない、そう思ったらとても楽なんじゃないか。

笹本 そこが教育と療育の違い。自分に戻らないと教師ではない。

瀧澤 「私が上手に預かれない」ということばをくあずかり＞の職員からよく聞く。私から見たら「あなたはよくやってるよ」と思える。「この子どもはこれから生きていくときにどういうことが今必要なことか」を考えながらつき合うことが大切なんじゃないか。＜あずかり＞が生活のどこにはいるかとは別に、「私がこうやりました」と言いたがる。その子が生きる力をつける事が大切なので、誰かが何かをやりまして言うことが大切なのではない。

笹本 「子どもがある」といった途端に自分が無くなってしまう。自分を問わないと駄目だと思う。

瀧澤 こちらは脇役。どうしても教師は主役になりたがるように思う。

富岡 小・中学校の授業研究は、授業の枠内だけで考えてやれるところがある。しかし、養護学校の場合は、この子どもは何か必要か、子どもの課題が何かというようにシフトしていく。学ぶのは子どもで、何を学んだのかを見るのが教師。形の弁別学習をやったとしても、そこで学ぶのは形の弁別だけではない。それを看取することに、教師の責任がある。そして、このことこそが教師の成長につながる。実は、小・中学校も授業研究も同じだ。

瀧澤 教師って「黒子」の存在だと思う。うまくやるほど見えなくなってきた、いらぬところまで行ったらすごい。「教え込む」中に「学び」の領域を拡大していく。

滝坂 子どもがそこで何を学んでいるのかを確認し、学びの課題を提供していく。無意識のうちに行われていくことを意識化してみる。そのような授業と授業研究が必要なわけではないか。

山口 <授業研究>をやったことがない。<研究授業>なら研究の観点があるが、授業研究と言ったとき、どんな観点を持ったらいいのかわからない。

滝坂 <授業研究>というのは、日々行っている授業を振り返って整理したり検討し、次の授業に活かすということだ。<研究授業>もその一つの形態として考えられると思う。ただ、自分のこれまで参加した<研究授業>の経験からいうと、その日のために一生懸命先生たちが準備し、指導案通り落ちのこないように授業をして助言者から講評をもらい、夜は打ち上げをするというものだ。これが必ずしも悪いとは思わないが、もっと、日常的に行われている授業の振り返りができないかと思う。私の考える授業研究は二つの側面がある。一つは、授業者である先生が構想した授業がどのように展開したか、そのなかで子どもはどのように学習を成立させたかという側面であり、今ひとつは予め考えることができなかつた自分の姿、子どもの姿にどう気づいていくかという側面だ。私は特に後者の側面がとても重要だと思っている。それを、教員集団で行いそれぞれが自分のこととして共有していくということだ。

中野 今勤務している小学校では、13人の先生全員が全部の子どもたちを知っている。ある学年で授業研究をやるとうちの学年でもやましようと思って帰ることができている気がする。養護学校の場合、個々の子どもの研究が進むと「それはその子の問題ですよ」と感じてしまう人がいるのではないか。「そうだね」と思うにとどまり、「じゃ、自分の担当している子にこう活かしていこう」というようになりにくい。全体が見えにくくなり、授業研究が広がり

にくい。

伊藤 研究授業はやめましようと言うのは簡単。「研究授業」と「授業研究」の違いがわからない人ばかり。校内のシステムをつくることで、一人一人のやり方が消されてしまう。もっと、主体的に楽しんでやりたい。もっと、先生たちに任せればいい。それで困る人には支援をすればいい。

秋田 管理職にビジョンがないと何も出てこない。「現実対応」しか出てこない。

Ⅲ. 開かれた学校、地域における役割

富岡 「自分(養護学校)が何かを持っているから」地域に提供できるというものなのかどうか。養護学校は地域一般からそんなに期待されているのかどうか。そこに子どもを通わせる保護者にとっては当然期待があるわけだけれど。そのように考えると、まずできることは閉ざされた学校をありのまま開くこと。内部のためにも開くことが大切。学校を相対化する。養護学校にはその経験がない。建物を開いても開いたことにはならず、「授業を開く」しかない。「開いたら辛い」と思うものを開かないと駄目だ。

舟川 篠山の場合、養護学校の教育相談だけでは、まかないきれない。しかも、個人に頼ってきたという側面がある。早期指導だけではなく、「話したい」という保護者の心理的な「捌け口」の場になってきたという側面もある。

富岡 昔、小中学校の先生は地域の相談役だったという時代もある。しかし、相談は相談するところへと分化してきた。

瀧澤 成長過程を見てきた事例にケースワーカーが入ると途端に全体が見えなくなるということがある。この分野は〇〇相談、この分野は△△相談と、バラバラにされてしまう。本当は、学校の先生もその家族全体を担うという視点が必要なのではないか。

中野 障害児学級ができて教師がどうしたらよいかわからないときに、養護学校は頼りになる。教材・教具があるし、教育相談もある。研修をしようと思えばそれもできるし、篠山市では、障害児学級担任会を養護学校でやっている。小中学校と養護学校間の教師の交流がある。市立だからやりやすいというところがある。

秋田 市立養護学校といっても地域で成り立ちが違うのでおしなべてと言うことはできないが、お互いの関係が混ざ

り合うというこはある。ただ、人的交流も必ずしも見通しの元に行われているわけではない。身近なところで気軽にはなせる場として養護学校で話を受けようとしてきたということは言える。

渡辺 学校は構造を基本的に変えようとしな。教育の側から一歩も外に出ない。これはなぜなのか。福祉サイドからいろいろなことを聞きたい。学校現場から日常的に行ったり来たり、呼んでもらえると行きやすい。外の力を都合よく使うけれど、中は変わらないという印象を強く受ける。双方向の仕組みをつくらないと始まらない。

瀧澤 「先生」って偉い。「来ていただいてよかったね」というレベル。住民が参加して何かをやるといった学校開放や、学校が多職種になることで先生の意識や在り方が変わっていくのではないか。

滝坂 今日の討論から、取り組んできた二つの課題については今後さらに実践的というか、実際的な検討が必要だということになる。しかも、こういった観点については社会的な意識が今後とても高まっていくのではないか。それぞれの場で取り組みつつ今後も交流をして行けたら大変有り難いし、心強い。3年間の御礼と共にこのことを申し上げて終了にしたい。